

Vogelen, Kronkel-Dieren, Slangen en Draken. 文沢はほぼ正確に典拠を示しているが、厳密にいうと「オランダウータン」などの名称が載っているのは一一六ページのほうである。

(23) 国会図書館所蔵。

(24) 「サテイル」は Satyr か Sater のはずである。Satiroe は「サテイル」というカタカナをふたたびオランダ語表記に戻したものである（オランダ語の *o* は日本語の「ウ」にあたる）。その他いくつかの理由により、国会図書館本は、オランダ語の基礎語彙を知っているレベルの人物が書写し、勝手に不正確な「原語」を付したものと推測される。

(25) 『海上珍奇集』の成立年代は不明だが、作者が志筑忠雄だとすれば、『五巻本博物誌』記事の要約が含まれる『万国管圖』よりも前ではなからうか。いずれにしても彼がフリニウスに関心を持っていた天明年間の成立と思われる。本書には、サテイルのほか多くの「珍奇」な動物が紹介されているが（フリニウス由来の西洋怪物が網羅されている）、刊行されることなく写本で読み継がれていたらしい。

(26) http://www.dbnl.org/urls/titel.php?id=huy003nieu07_六八六ページ。

(27) <https://books.google.co.jp/books?id=B1MUAAAAQAAJ>, 二巻六四ページ。

(28) <http://ducange.ens.sorbonne.fr/Neptunus> 参照。

虹の橋と地獄の人参

—その発生と伝播を巡る考察(一)—

はじめに

「虹の橋」という話がペットを飼う人達の間で流行しているらしい。面識の無い二人の人間が、異なる場所での話をしているのを耳にしたことがあるので、それなりに市民権を得ているものなのだろう。その内容は次のようなものである。

この世を去ったペットたちは、天国の手前の緑の草原に行く。食べ物も水も用意された暖かい場所で、老いや病気から回復した元気な体で仲間と楽しく遊び回る。しかしたった一つ気がかりなのが、残してきた大好きな飼い主のことである。

一匹のペットの目に、草原に向かってくる人影が

(29) http://digital.ub.uni-duesseldorf.de/urn:nbn:de:hbz:061:1-84170_9A80ページ。

(30) 一巻二三オ。

(31) ジャン・アルドゥイン (Jean Hardouin, 一六四六—一七二九) がパリで出版した『博物誌』校注本 [Mayhoff 1967: 219] が参照されているが、一六八五年に出ているので『五巻本博物誌』よりも年代的には後である。ただし、当然ながらアルドゥインはそれ以前の版本を参照している。

(32) 一六五三年版 (<https://books.google.co.jp/books?id=GUAPAAAAQAAJ>) を用いた。

(33) 一巻二三オ。

(34) 早稲田大学古典籍総合データベース http://www.wvl.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko08/bunko08_b0001/

(35) インドに鳳凰が棲息しているという情報は、いわゆる天竺徳兵衛の『天竺渡海物語』(一六二七)にも記されている。いわく、「諸鳥も多く有之……鳳凰空を通り候へは、孔雀家々へ逃込申候。孔雀も大鳥にし候え共、鳳凰に被取候故、恐れをなし候」[岸上一九〇二:二〇一]。この書は静山が『甲子夜話』に引用するなど一九世紀にいたるまで流布し続けていた。この書のおかげもあって、インドに鳳凰がいるとする推論は受け入れやすくなっていたと思われる。(ひろた・りゅうへい)

加藤 秀雄

映る。懐かしいその姿を認めるなり、そのペットは喜びにうち震え、仲間から離れて全力で駆けていきその人に飛びついて顔中にキスをする。死んでしまった飼い主。あなたには、こうしてペットと再会し、一緒に虹の橋を渡っていく。

Wikipedia「虹の橋(詩)」解説より⁽¹⁾

筆者が聞いた話は、「ペットは死ぬと『虹の橋』ってところに行つて、橋のたもとで飼い主が来るのを待っているんだつて。飼い主が来ると一緒に橋を渡つて天国で幸せに暮らすんだよ。飼い主がいなかった動物達はペットを飼ったことがない人達と一緒にたつて橋を渡るんだつてさ」というものであった。後日、調べてみたところ、出典は作者不詳の散文詩で、一九八〇年から一九九二年の間にアメリカで制作されたものだと言われている。筆者が聞いた話のように現在で

はいくつかのバリエーションが存在し、主にインターネットを介して世界各地で受容されるものになっている。その発生と伝播、受容のされ方を鑑みるに、きわめて現代的な「フォークロア」であるということが出来るだろう。

本稿では、この「虹の橋」の発生と伝播、そして受容のありかたを検討しながら、ある一定の形式を持つ「話」が、現代社会においてどのように流通しているのか、その一端を明らかにすることを目的としている。ここで重要なのが、Web上の情報を含む「書かれたもの」がどのようにに生活世界の「語り」に影響するのかという問題である。このテーマについては「書承と口承」、「口頭伝承と文字文化」の関係性を巡る膨大な研究蓄積が存在しており、「伝承」を「書かれたもの」と「語られたもの」の連環として捉える研究視角は、近年では一般化したものとなりつつある。

こういった先行研究の中でも、本稿の関心と強く関わるものとして大島廣志による一連の論考が挙げられる[大島 二〇〇七]。近現代以降、日本国内で採集された昔話の中には、その起源として同時代的な海外の昔話の翻訳・翻案、小説といった「著作」が位置づけられる事例が少なからず存在することを明らかにした点は、特定の地域社会内や移動する人々によって伝説、昔話が生成・伝播するという従来の見方に再考を促すものであった。伝説や昔話が

がある。巖谷小波の児童文学や、小泉八雲の小説、グリム童話の翻訳・翻案が、各地で伝承されている昔話の発生と伝播に影響を与えていることが明らかにされたのである。大島は次の様に述べる。

書承文芸の口承化については、これまでに何度か言及してきた。「お雪」の名を冠した「雪女」の話は、遡っていくと小泉八雲の「雪女」〔怪談〕、一九〇四に至るし、逃走譚の「大木丸の木の葉姫」は、グリム童話「みつけどり」(KHM五一)に辿りつく。他にも「大工と鬼六」は水田みつの翻案「鬼の橋」を基にした話であり、岩手の「狼と犬」はグリム童話「ズルタンじいさん」(KHM四八)の口承化であると論じられている。[大島 二〇〇七：八〇]

同様の観点から昔話の分析を試みた例として「櫻井 一九八八、一九九二」、「野村 一九八四」などが挙げられているが、こういった近代の小説や海外の昔話の翻訳・翻案の影響を受けたと考えられる話を、本稿では大島に倣って「外来昔話」と呼んでおきたい。

外来昔話の可能性が推定される事例の文献学的な分析において重要なのは、それが特定の書承文芸に先行して伝

「書かれたもの」との交渉の中に存在することについては、口承文芸研究の草創期から意識化されていたが、それは過去の「書かれたもの」だけでなく、同時代の「書かれたもの」とも極めて近い関係にあったのである。

既に述べた如く本稿の主要な関心は、この「話の現代性」という問題であり、「虹の橋」を事例としながら現代の情報化社会における「話」のあり方を考察することにあるが、その分析の補助線として、恐らくは、これも極めて特殊な成立事情を持つと思われる「地獄の人参」を合わせて取り上げてみたい。「地獄の人参」と「虹の橋」という二つの話の成立と伝播を比較することは、誰もがWeb空間のテキストにアクセスすることが可能な現代社会と、それ以前の社会におけるテキストの影響下にあった「現代的な話」がどのような異同を持つのかを理解する上でも有効だと筆者は考える。

1、書承文芸の口承化

大島廣志著『民話―伝承の現実』(三弥井書店、二〇〇七)の「伝承の近代」に収録された六本の論文は、いずれも「書承文芸の口承化」という問題を取り扱っており、ここで言う書承文芸は近代以降の産物である点に特徴

承されていたものなのか、あるいは書承文芸の影響を受けたものとして成立しているのか、その前後関係を明らかにすることである。関敬吾は、グリム童話の「森の三人の小人」(KHM一三)に類似した「継子の苺拾い」を取り上げた「ヨーロッパ昔話の受容―〈白い嫁黒い嫁〉を例として」という論考の中で、その系統関係について次の様な仮説を提示している。

奄美の〈白鳥の姉〉はすでに述べたように、グリムの〈白い嫁黒い嫁〉と同じ系統だが、グリムの昔話 がわが国に移入されたものではなく、むしろグリム以前から奄美には伝承されていたものであろう。ヨーロッパ独自の説話でないかぎり、現在のこうした伝承物語はヨーロッパからの受容より、中国・インドなどを経てグリムなどより早く日本に入っていたのではないだろうか。[関 一九七四：一三二]

関は「白鳥の姉」、「継子と苺拾い」のような日本国内におけるグリム童話に類似した昔話が、グリムの翻訳・翻案の影響ではなく、中国・インド経由で国内に流入したものであると述べている。しかし少なくとも、山梨県西八代郡上九一色村(現甲府市)に伝わる「継子の苺拾い」に

は「六月息子⁽¹⁾」というヨーロッパ独自のモチーフが混入しており、大島はこのモチーフが一八九三年に発表された巖谷小波作「お雪とお花」に見られることから、その影響関係を指摘している。その上で、「つまり、ヨーロッパモチーフ（六月息子）が自然的伝播によって山梨に辿り着いたのではなく、明治期に入ってから書本文芸の口承化によって、山梨に（六月息子）モチーフが存在したということになるのではないだろうか」と推測しているが「大島二〇〇七・八八」、ここで注意しておかなくてはならないのは、日本国内の外來昔話と思われる事例も関が述べているような自然的伝播による伝承の可能性が捨てきれないという点だろう。

大島もこの点には慎重で、グリムに類似する日本国内の昔話が全て「書本文芸の口承化」による外來昔話であると断定していない。つまり可能性の一つとして、自然的伝播による伝承と書本文芸の口承化による伝承の併存状況、あるいは先行する自然的伝承への書本文芸の混入といった現象も仮定することが出来るのである。口承文芸の国際比較には、このような分析上の難点が存在するが、少なくともモチーフレベルでは、明らかに近代以降の書本文芸が、生活世界の語りに影響を与えるものであったことが理解されるだろう。

2、地獄の人參

(1)「蜘蛛の糸」に類似するその内容

前章では近代以降の海外の昔話の翻訳・翻案、あるいは小説の影響下にあると考えられる外來昔話の概要について見てきた。以下では、このような事例の一つとして位置づけられる可能性を持つ「地獄の人參」という昔話を取り上げて考察を加えていきたい。

「地獄の人參」は、野村純一が『日本の世間話』（東京書籍、一九九五）でも言及している昔話で、その内容は次の様なものである。

大正七年から八年にかけて、流行性感冒という風邪が流行った。その風邪のためにその頃、たいした（大勢の）人が歿^なくなった。

その頃、新庄さご詠歌指導のお婆さんがいた。そこで、そのお婆さん、朝鮮から朝鮮人參を取ったところ、感冒にはたいした名薬であった。そこでそのお婆さん、人參を飛ぶように売った。あるとき一人のお爺さんが来て、

「自分は金もなにもないし、何とか朝鮮人參を分けて

くれ」

と頼んだ。お婆さん、あんまり願わって、人參の屑をあげた。

七年から八年にかけての感冒ださげ、春になってあんまり儲けたさげ、今度札を勘定したげ、二階六畳一間を借りていたお婆さんださげ、札を一枚ずつ並べて、あんまりもせぐで、二階いっぺになって、ぐらりぐらり、引つ込み、引つ込みすつと、二階からドンと落ちたど。運悪く血を吐いて死んでしまったど。

そうすつと、悪婆さんのこつださげ、直ぐ地獄さやらつてしまたけど、そこでその婆さん、念仏唱えるしかねんださげと、念仏唱えたと。自分のかかりはせんじよ（千手）観音さんで、せんじよ観音さんが調べて、いったん地獄さ行ったんでも、良く調べたところ、その婆さん、人參の屑をやつて人を助けたごあつさげ、いいことしたときもあつさげとせんじよ観音さまが五色の車さ乗って、その婆さん助けどして、綱を下げた。

綱を下げださげ、その綱さわれもわれもと、せんじよ観音さまから連れて行がれなんだと下がったど。そうすつと、その婆さんのことださげ、

「おれ、いいことしたなださげ」

ど払いだど。すつと、その綱、ブツツと切つてしまつたど。そこで、その婆さん今でも地獄さいつと。

んださげ、欲なの出すもんでね。「野村 一九九五・一五六―一五七」

この昔話は山形県酒田市にすむ斎藤直七氏（一八九四年生まれ、飽海郡九東平田村出身）から一九八四年に野村が聞き取ったもので、斎藤翁はこの話を「明照寺の説教の際に坊さんから聴いた」と述べている。

引用からも明らかのように、この話は芥川龍之介の『蜘蛛の糸』（一九一八）と酷似した内容となっている。野村は当初、この話を『蜘蛛の糸』からの換骨奪胎、つまりは直七翁が説教を聴きに赴いた明照寺での説教話であろうと判断した⁽²⁾が「野村 一九九五・一六八」、後に山形だけでなく、愛媛、福島、宮城でも、ほぼ同内容の話が採集されたことにより、次の様な見解を示すに至った。

これが元来『蜘蛛の糸』にもとづいた改変とか改竄であったれば、これまた流布する地域はあまりにも広すぎる。いふなれば、この間の伝承、分布の説明にやや窮するとするのが本音である。

それからして思うに、ひよつとするとこれら一連の

話は、『蜘蛛の糸』とは別様、他に独立して用いられていたのではなかったのか。そしてそれは行くさきざきにあつて、時と処の情況に合わせてしばしば世間話風に説かれていたのではなかったのか、そのように考えざるを得ないからである。もちろんこの場合にも直接、その種を持ち歩いたのは、いうまでもなく、説教とその布教活動に熱心であった人々であったことに疑いの余地はない。〔野村 一九九五・一六九〕

宮城、山形、福島、愛媛の四つの事例はその全てが「人参」というモチーフを用いる点で共通している。山形と福島のもの「朝鮮人参、薬人参」を「風邪で困っている爺」に施し、宮城、愛媛のものでは「腐った人参」を「乞食、旅僧」に施す点が異なっているが、こうした細かな差異はあるものの、近世中期から末期にかけて栽培が盛んになる「人参」や大正年間における「スペイン風邪の大流行（流行性感冒）」といった歴史の出来事がモチーフとなっていることから、これらが極めて「現代的な昔話」であった可能性は高い。そして、その発生と伝播に「説教とその布教活動に熱心であった人々」の影響があったことは、野村が述べる通りだと考えられるが、彼等が何に着想を得てこれらの話を行ったのかという点は、外来昔話の性質を考察

する上でも極めて興味深い問題である。以下では、「地獄の人参」の成立に影響を与えた可能性が想定されるテクストの問題を見ていきたい。

② 鈴木大拙訳『因果の小車』とドストエフスキー

『カラマゾフの兄弟』

「地獄の人参」が外来昔話であるとすれば、これに影響を与えたテクストの有力な候補が『蜘蛛の糸』である可能性は捨てきれない⁶⁾。しかし『蜘蛛の糸』のプロットに類似する話は、この作品が一九一八年、児童雑誌『赤い鳥』第一号に発表される以前から、既に日本語のテクストとして国内に流通していたのである。

ここではそのような例として『因果の小車』、『カラマゾフの兄弟』という二つの作品を取り上げたい。

① 『因果の小車』における「蜘蛛の糸」

『因果の小車』は、ドイツの東洋学者であるポール・ケーラスが一九九四年に英文で『オープン・コート』誌に発表した『KARMA A TALE WITH AMORAL』という作品を、四年後の一九九八年に鈴木大拙が日本語訳したもので、長谷川商店から刊行された二十七頁ほどの小品である『ケーラス 一八九八』。この著作の一五〜一九頁に、ある

僧侶が例え話として語る「蜘蛛の糸」が収録されているが、この中には芥川の『蜘蛛の糸』の主人公である健陀多（カンダタ）の名前が見えることから、芥川がこの著作を自らの作品の材源として用いたことは現在、専門家の間でもほぼ通説となっている〔山口 一九六三〕。

つまり芥川の『蜘蛛の糸』が発表される二〇年以上前から、この話は仏教関係者を主な読み手とする『因果の小車』⁷⁾によって日本国内で知られていたということになるのである。この場合、「地獄の人参」を人々に語って聞かせた「寺の坊さん」が『因果の小車』を読んでいた可能性が生じてくるが、「カンダタ」、「蜘蛛の命を救う」といった仏教説話的な要素が「地獄の人参」において脱落している点には注意が必要だろう。

『因果の小車』が「地獄の人参」の典拠である可能性を保留しつつ、次に見ておきたいのが、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』に登場する寓話「一本の葱」である。この寓話は『因果の小車』以上に、かなりの点で「地獄の人参」との内容的な一致が見られるのである。

② 『カラマゾフの兄弟』における「一本の葱」

ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』は一八八〇年に発表された作品で、先に見たケーラスの『KARMA

TALE WITH AMORAL』よりも更に古いものとして位置づけられる。日本における受容は、一九一四年の米川正夫訳が最初期のもので〔西洋大著物語叢書〕五、新潮社）、現在に至るまで繰り返し翻訳がなされているが、その訳出も芥川の『蜘蛛の糸』に四年ほど先行する。この『カラマゾフの兄弟』第七編「アリョーシャ」において、登場人物のグルーシエニカが次の様な話を語り出す。

これって単なるおとぎ話だけど、とつてもすてきなお話なの。わたしがまだ小さい頃、今うちで料理番をしているマトリョーナからこの話を聞いたわ。よくなって、じゃあ話すわね。

『昔あるところに、それはそれは意地の悪い女が住んでいて、ぼつくり死んでしまいました。死ぬまでひとつとして美談がありませんでした。悪魔達がその女をつかまえ、火の湖に投げ込みました。そこで、その女の守護天使がそばにじつとたたずみながら考えました。何かひとつでも、この女が行った美談を思いだして、神さまにお伝えできないものだろうか、と。そこでふと思ひ出し、神さまにこう告げたのでした。この人は野菜畑で葱を一本引き抜き、乞食女に与えました、と。すると神さまは天使に答えました。へではその葱を

取ってきて、火の湖にいるその女に差し出してあげなさい。それにつかまらせ、引っぱるのです。もしも湖から岸に上げれば、そのまま天国に行かせてあげよう。その葱が切れてしまったら、今と同じところに残るがよい。天使は、女のところを駆け出し、葱を差ししました。さあ女よ、これにつかまって上がってください。そこで天使はそろそろと女を引き上げにかかりました、そしてもう一步というところまで来たとき、湖のほかの罪びとたちが、女がひっぱり上げられるのを見て、いっしょに引きあげてもらおうと女にしがみついたのです。するとその女は、それはそれは意地の悪い人でしたから、罪びとたちを両足で蹴りおとしはじめたのでした。(引っぱりあげてもらってるのはわたしで、あなたたちじゃない、これはわたしの葱で、あなたたちのじゃない)。女がそう口にしたとたん、葱はぶつんとちぎれてしまいました。そして女は湖に落ち、今日の今日まで燃えつづけているのです。そこで天使は泣き出し、立ち去りました。『ドストエフスキー 二〇〇七・七八―七九』

一見して分かるように、グルーシエニカが語る「一本の葱」の話は「地獄の人参」、「蜘蛛の糸」と類似した構成と

「一本の葱」の話自体も、古くから南欧に伝わった民話であるからヨーロッパ生まれのケーラスの熟知するところのものであったかもしれない。いずれにしてもこの辺のことは、推測の域を出ないものである。

〔山口 一九六三・二六〕

このように述べた上で、「蜘蛛の糸」が仏典に典拠を持つ可能性も指摘しているが、やはり古くからヨーロッパに伝わる民話が、ドストエフスキーの「一本の葱」、ケーラスの「蜘蛛の糸」の成立に影響を与えた可能性が最も高いだろう。

「一本の葱」に類似する話は、グリム兄弟に影響を受けたロシアの民俗学者アレクサンドル・アフナーシェフの『ロシア民話集』(一八五五―一八六三)にも「キリストの兄弟」として収録されており「アフナーシェフ一九八七」、『ニルスのふしぎな旅』の著者として著名なスウェーデンの作家セルマ・ラーゲルレーヴ『キリスト伝説集』(一九〇五)にも「わが主とペトロ尊者」として記されている「ラーゲルレーヴ 一九八四・二〇三―二一八」。ラーゲルレーヴの場合は伝説の翻案だが、先行する民話がヨーロッパに流通していたことを伺い知る上でも好個の事例であると言える。また山口が言う「古くから南欧に伝わる民話」としてイタリアやスペインに伝わるシエナのカ

なっている。しかしある「意地の悪い女」が「葱」を「乞食女に与えた」というモチーフは、「カンダタ」が「蜘蛛の命を救う」という「蜘蛛の糸」の内容よりも、更に「地獄の人参」に近い内容であると言えることができるだろう。

それでは、「地獄の人参」は「カラマーゾフの兄弟」の読者による翻案によって外来昔話化したものであると言えるであろうか。この問題を考察するにあたって、芥川の『蜘蛛の糸』の材源が『因果の菌車』にあることを突き止めた山口静一による議論を確認しておきたい。山口が指摘を行うまで、芥川の『蜘蛛の糸』は「一本の葱」に着想を得たものであるとの誤解が広まっていたが「吉田 一九五八」、既に確認したように『蜘蛛の糸』の材源は『因果の小車』である。その上で、山口は次の様な問いを提示している。

ポール・ケーラスは、通俗的ではあるが一千余のエッセイを書き五十冊以上の宗教論を発表するほどの精力的な仕事をした人であった。おそらく、数多くの仏教の聖典にある種々の因果物語からヒントを得て、「カルマ」物語をまとめあげたものである。この場合、吉田精一氏のいうドストエフスキーの「一本の葱」の話は、ケーラスの構想をまとめる上に大きな助けになったものかもしれない。しかしまた、

タリナを巡る次の様な伝説が存在する。

カタリーナは死後天国で主イエスと聖母マリアに可愛がられていた。

ある時母が悪態をつくという罪から地獄へ行かされる事を知ったカタリーナは、主イエスと聖母マリアに母を天国に入れて下さいと頼んだ。聖母マリアに命じられた天使がカタリーナの母親を地獄から天国へ連れて行くこうとすると、他の魂がカタリーナの母親にしがみ付き一緒に天国へ行こうとした。その際カタリーナの母親は「天国へ行きたければ私の様に聖女を娘に持つ」と他の魂に悪態をついたため、地獄に戻されてしまった。カタリーナは再び同じ頼み事をするが聞き入れられなかったため、自ら天国を離れ母親のいる地獄へ移って行った。『エスピノーサ 一九八九・一一四―一一六』

以上のことから、「一本の葱」「蜘蛛の糸」に類似する内容を持った口承文芸は、『カラマーゾフの兄弟』、『因果の小車』の発表以前からヨーロッパに存在していたことが確認されたが、ひとまずここまで見てきた内容の小活として「地獄の人参」が、どのような成立の背景を持つのかということ

を、いくつかの可能性を提示する形でまとめておきたい。
 小活

「地獄の人参」が近現代における書本文芸の影響下にあったとした場合、ここまで取り上げた著作の受容の問題と絡めて整理すると、次の様な可能性を想定することが出来る。

①「因果の小車」の「蜘蛛の糸」による影響

『因果の小車』は一八九八年に邦訳されたという点で、今回取り上げた、どの作品よりも古いものとして位置づけられる。そして、これが仏教者を読者に想定して書かれたという意味でも「地獄の人参」を語った人びとに参照された可能性は高い。ただし、カンダタや蜘蛛の糸といった重要なモチーフが「地獄の人参」において消滅している点には注意を要する。

②「カラマゾフの兄弟」の「一本の葱」による影響

一九一四年に翻訳された『カラマゾフの兄弟』における「一本の葱」が「地獄の人参」を語る人々に参照された可能性も、モチーフの類似という点から見た場合、それなりに高いと言える。しかし、この著作が当時の日本国内における地域社会で、どこまで受容されていたのかという問題があるた

一致という問題を考えた場合、この可能性も捨てきれない。

以上、「地獄の人参」がどのようにして成立したのかという問題について、いくつかの可能性を検討しながら議論を進めてきた。このいずれが真実であるのかを明らかにするためには、更なる事例の収集とその比較が必要になってくるだろう。これについては今後の課題であるが、「虹の橋」を取り上げるにあたって「地獄の人参」の事例が示す重要な観点は、生活世界における語りが、国境すらも越えた極めて広い空間と関わる問題であるという点、そしてテクストという存在がその生成と密接に関わっているという点にあるだろう。「虹の橋」はそのような空間で生じたテクストに起源を持つのである。

(※「虹の橋と地獄の人参」その発生と伝播を巡る考察(二)「こつぱく」)

注

(一) Wikipedia「虹の橋(詩)」参照。二〇一六年二月二十七日確認

(二) たとえば「笹原編 二〇〇九」などを参照のこと。

(三) 柳田國男は『口承文芸史考』(一九四六)のなかで次の様なことを述べている。

め、その考察が不可欠となる。あくまでも想像の域を出ないが、斎藤翁に「地獄の人参」を語ったような僧侶達が「読んだ可能性」は、『カラマゾフの兄弟』よりも『因果の小車』あるいは、次に取り上げる芥川の『蜘蛛の糸』の方が高い。

③芥川『蜘蛛の糸』の影響

一九一八年に発表された『蜘蛛の糸』は幅広い読者を獲得し、学校教育の場でも流通するものであった。そのような意味でも「地獄の人参」の成立にこの作品が影響を与えた可能性は高いが、『因果の小車』より二〇年以上も新しい作品である点がかかる。また、『因果の小車』と同じく登場人物、モチーフが「地獄の人参」とかなり異なる点には注意を要する。

④そのいずれに対しても「地獄の人参」が先行した可能性

最後に指摘しておきたいのが、「地獄の人参」が『因果の小車』、『カラマゾフの兄弟』、『蜘蛛の糸』のいずれに対しても先行していた可能性である。この場合、ヨーロッパで古くから伝えられていた民話、キリスト教的な伝説が、なんらかの経路を通じて日本国内に移入されたことになるが、近世、近代に日本国内に入ってきた外国人による「自然的伝播」の可能性がここでは想定されるだろう。分布状況とモチーフの

我邦には限らず、この口承の文芸が孤立して居た国、即ちその隣に在る手承眼承の本格文芸と、手を繋いで居なかつた国などは一つも無い。……此二つが並び存すとすれば、互ひに又交渉せずには居られなかつたのである。早い話が日本国民の持ち伝へて居る最も古い昔語の一つは、そのかみ記憶力の優れた或一人の若い女性が、暗誦して居たもの、筆録であつた。……後代の言語芸術に於ては、如何に無識なる咄家たちの漫談でも、曾て読書裡より導き来つた話柄を、少しも応用して居ないものなどは何処にも無い。【柳田 一九九二・三八六】

このような「口承の文芸」と「手承眼承の本格文芸(書承)」の関係性は「印刷」の技術によって「恐ろしい程の大きな変革」を見ることになる。

(4) 「十二月の神」の息子とされる。暦が擬人化した神性。

(5) 例えば『日本昔話通観 二二二 愛媛・高知』(同朋舎出版 一九七九)の二五七―二五八頁に「一三五 地獄の人参の綱(原題・腐った人参)」として収録されている。

(6) 芥川の「蜘蛛の糸」は発表後すぐに芳賀矢一の『国語読本』に収録され、その翌年には、中学校女学校の読本にも転載された【山口 一九六三・二九】。学校教育において流通したこの話が、「地獄の人参」の成立に影響を与えた可能性

もあるが、後に論じるように筆者の見解はこれとは異なる。

- (7) 一八九五年に『KARMA TALE WITH AMORAL』は英文のまま日本国内で紹介されたにも関わらず、翌一八九六年には再版されるほどの好評を得た「山口一九六三・一七」。このような背景から、かなり早い段階での日本語訳が行われたものと推測される。なおヨーロッパにおいては、一八九四年、レフ・トルストイがただちに翻訳を行っており、これがトルストイの作品であるとする誤解も生じた。トルストイ訳「カルマ」は中村白葉の重訳によって一九三〇年に日本で紹介されている。一九八七)には収録されていない。
- (8) 抄訳であるアフナーシェフ『ロシア民話集』(岩波書店、一九八七)には収録されていない。
- (9) 引用文は筆者による抄出。

参考文献

- アフナーシェフ『ロシア民話集』(中村喜和編訳) 岩波書店 一九八七
- エスピノーサ『スペイン民話集』(三原幸久編訳) 岩波書店 一九八九
- 大島廣志『民話―伝承の現実』三弥井書店 二〇〇七
- ケラス『因果の小車』(鈴木貞太郎訳) 長谷川商店 一八九八
- 櫻井美紀『大工と鬼六』の出自をめぐって『口承文芸研究』

一一、日本口承文芸学会 一九八八

- 櫻井美紀『昔話「味喰買橋」の出自―その翻案と受容の系譜』『口承文芸研究』一五、日本口承文芸学会 一九九二
- 笹原亮三編『口頭伝承と文字文化―文字の民俗学 声の歴史学』思文閣出版 二〇〇九
- 関敬吾『ヨーロッパ昔話の受容―〈白い嫁黒い嫁〉を例として』『日本の説話』六、東京美術 一九七四
- ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』三(亀山郁夫訳) 光文社 二〇〇七
- 野村純一『グリムの行方』『同朋』七二、七三、七四、同朋舎出版 一九八四
- 野村純一『日本の世間話』東京書籍 一九九五
- 柳田國男『口承文芸史考』『柳田國男全集』一六、筑摩書房 一九九九
- 山口静一『蜘蛛の糸』とその材源に関する覚書き『成城文藝』三二、成城大学文芸学部 一九六三
- 吉田精一『芥川文学の出発点』『近代文学鑑賞講座』一一角 川書店 一九五八
- ラーゲルレーヴ『キリスト伝説集』(イシガオサム訳) 岩波書店 一九八四 (かとう・ひでお)

「世間遺産」と「地域遺産」

―なんでもないようなものを遺産にする動きに着目して―

山川 志典

一、はじめに―背景と目的

現在、日本各地で、文化や自然が「遺産」として評価され、その保存や活用が盛んに行なわれている。最も関心を集めていて広く知られている遺産は、UNESCOによる世界遺産だろう。近年の世界遺産登録決定時には、世界遺産委員会の中継を見守る行政職員・地域住民の姿や決定後の歓喜の声が報道され、その地域では号外が配られるなど、関心の高さが見て取れる。その他にも様々な遺産がメディアを賑わし、また地域の活性化や観光の目玉としても取り上げられている。そこには、日々の暮らしのなかにあるものを遺産にする動きも見られる。

本稿では、そのような動きのなかから「世間遺産」と「地域遺産」に着目する。まず、世界遺産をはじめとした

多様な遺産の現状を確認した上で、九州で活動を展開する三者の「世間遺産」の比較からその実態の把握を行うとともに、遠野遺産から「地域遺産」の特徴を把握し、「世間遺産」と「地域遺産」という二種類のなんでもないようなものが遺産になるという現状を比較した上で、現在、人々がなにをどのように遺そうとしているかを考察する。

二、多様化する遺産

二・一、「世界の遺産」を目指して

世界遺産は、UNESCO総会で一九七二年に採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(通称「世界遺産条約」)に基づき「世界遺産リスト」に登録された、消失の危機から国際的に保護する必要がある文化や自然であり、「顕著で普遍的な価値」(Outstanding Universal

◇ 編集後記 ◇

編集委員を務めております、大道です。『世間話研究』第二十四号をお届けいたします。前号におきましては、作業の遅れから会員の皆様に変な迷惑をおかけしてしまいましたので、予定通りに発刊することができ、ほっと胸をなでおろしている次第でございます。ご協力を賜りました執筆者の皆様にも、この場をお借りしましてお礼を申し上げます。また、御著書をご惠贈くださいました久野俊彦様に、心より感謝を申し上げます。

今号は、五本の論文と一本の書評を収めた読み応えのある一冊となりました。その射程は国内諸地域から国外までと広範にわたり、視座の点でも、専門性の違いから多様性に富んだものとなっております。編集担当といたしましては、本誌が領域横断的な学術的交流の場として機能していることを非常にうれしく思うと共に、今後、そうした交流がますます盛んになることを期待しております。雑誌と合わせて、例会発表につきましても是非ご活用をいただければ幸いです。

(大道)

世間話研究会

例会担当 飯倉義之・今井秀和・高塚さより
編集担当 竹内邦孔・大道晴香
会計担当 今井秀和
頒布担当 飯倉義之

例会の問い合わせ・バックナンバーの問い合わせ・申し込み

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 國學院大學

若木タワー15F 1509 研究室 飯倉義之

平成二十八年五月三十一日発行

世間話研究 第二十四号 頒価 一〇〇〇円

編集・発行 世間話研究会

制作 オリオン出版